

作家の肖像

第 21 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。

撮影：佐藤大作
提供：公益財団法人岐阜現代美術財団



1913-2021
篠田桃紅

しのだ・とうこう

1913年中国・大連市生まれ。美術家。5歳から家庭で書の手ほどきを受け、その後は独学で書を習得。墨を用いた抽象表現という新たな芸術を切り開き、注目を集める。56年に単身渡米し、各地のギャラリーで個展を開催。58年に帰国後も、レリーフや壁画などの建築物に関わる大作を手がける一方、版画や題字、随筆など、多岐にわたって活動した。2021年3月、107歳で死去。

空間と共鳴する作品

あのときの感動は、今も鮮明に覚えています。2003年、まだ東京都品川区にあった原美術館で開かれた、桃紅さんの90歳記念展でのこと。私は初日に伺ったのですが、作品の置かれた空間全体から、心地よい「震動」を感じました。作品が周囲の空間に溶け込み、共鳴し、響き合っている、そんな感覚でした。

作品が単体でもつ意味がどうか、そういった狭い範囲の芸術で捉えられること以上に、作品が置かれたとき、その作品が周囲の環境とどのように対話するかというところに、桃紅さんの創作の意味はあったのだと思います。まさに、空間ごと鑑賞する作品でした。

凛とした立ち姿

その個展で初めて桃紅さんとお話しする機会にも恵まれました。今思えばたいへん失礼なこと——冗談交じりに、桃紅さんの青春時代に関することを伺ったのです。結局何ともお答えにならなかったのですが、少し頬を赤らめながら、非常にきれいな笑みを浮かべてらっしゃった。「ああ、やばなことをきいてしまった」とすぐに反省したのですが、どこかそういう質問を投げたくなるような、人としての魅力にあふれた方でした。

また、2016年に当館で近代建築に関する企画展(※1)を開催した際、桃紅さんに題字をお願いし、ご本人にもオープニングイベントにご参加いただきました。車いすでいらっしゃったのですが、来場者の待つ会場へ向かう段になると、ずっと車いすから立って歩いていかれたのを覚えて

います。「篠田桃紅」としての矜持(きやうじ)でしょう。凛としたその立ち姿は、たいへんに美しく見えました。

1本の線に宿るもの

潔く引かれた流麗な線は、ためらいなく一気に描かれたように見えて、実はどこかで滞っているのではないか。桃紅さんの作品は、私にそんな予感を抱かせます。もちろん、達人の域に達している方ですから、作品からはそんなことは垣間見えません。ただ、さまざまな感情に自分をせき止められながらも進んだ線が、結果として、私たちの目には明快な線に見えているだけではないか。そんなふうを感じるのです。

その生き様から「孤高」と表現されることも少なくない桃紅さんですが、決して独りよがりな方だったわけではありません。筆を握り続けた107年の生涯で得た、さまざまな方との出会いや無数の体験の蓄積が、1本の線に宿っているのだと思います。ご自身の作品と同じです。社会という空間の中で、どのように周囲と共鳴し、どう在るか。そういったスケールの大きい考えをもった方でした。(談)

※1「竹中工務店 400年の夢 一時をきざむ建築の文化史—」(2016.4.23-6.19)

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



左／「おもい」

和紙 墨、銀泥 129×60cm 2001年
公益財団法人岐阜現代美術財団蔵
晩年は余分な要素が削ぎ落とされ、1本の線の存在感が際立つように。余白の重要性も増し、画面がより洗練されていった。

右上／「うぶ」

キャンヴァス 墨、銀泥、胡粉、銀地 175×103cm 1994年
公益財団法人岐阜現代美術財団蔵
90年代以降は金や銀が多用されるようになり、本作のように金地や銀地を背景にし、墨色を際立たせた幽玄な作品も数多く発表した。



右下／企画展「竹中工務店 四百年の夢」のチラシ

2016年 画像提供：世田谷美術館
世田谷美術館で開催された企画展。題字を篠田が描いた。